HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学コミュニケーションとメールマガジン : 「サイコムニュース」が目指すもの
Author(s)	立花, 浩司
Citation	科学技術コミュニケーション, 1, 113-116
Issue Date	2007-03
DOI	10.14943/17544
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/18948
Type	bulletin (article)
File Information	JJSC-113-116.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告

科学コミュニケーションとメールマガジン
～「サイコムニュース」が目指すもの～

立花　浩司

Communicating about science and e-mail newsletters: What "SciCom News" aims at?

TACHIBANA Koji

Keywords: science communication, NPO, SciCom Japan, science policy, e-mail newsletter

1. 概　　要

科学コミュニケーションは，単に科学者・研究者や科学コミュニケーターだけで語られるべきではなく，科学的なかかわりをもつ一般市民などをすべて巻き込む形で考えていくことが重要である．本稿では，このような考えを踏まえ，日本における科学コミュニケーションの草分け的存在であるメールマガジン「サイコムニュース」について紹介を行う．

2. はじめに

2003年8月に創刊した「サイコムニュース」[1)]は，NPO法人サイエンス・コミュニケーション（サイコムジャパンと略）[2)]が発行するメールマガジンである．科学技術政策から，大学・研究者を取り巻く話題，身近な科学コミュニケーションなど，幅広い内容を取り上げている．原則として毎週月曜日に発行しており，メールマガジン発行スタンドである，まぐまぐ，もしくはmelma! でメールマガジン登録すれば，だれでも無料で配信を受けることができる．

発行部数は，創刊以来ほぼ一貫して増え続け，2007年2月11日現在，まぐまぐ，melma! 合わせて2252部に達している．また，メールマガジン登録をしなくても，これまでのバックナンバーをウェブ上で読むこともできる．そのため最近では，まぐまぐのデイリーアクセスランキング（教育・研究カテゴリ）のベスト10にランキングされることもある．科学コミュニケーション関係のイベント等で「読んでますよ」という声をかけられることも多くなり，これらは編集作業の大きな励みとなっている．

筆者は「サイコムニュース」創刊以来の読者である．2年前に編集ボランティア募集の広告記事を読み，人助けのつもりで編集作業に関わるようになった．現在は，科学コミュニケーション活性化のために，サイコムジャパン会員の立場で，NPOにおけるボランティアの一環として編集活動を続けている．

本稿では，これまで科学コミュニケーションに関するさまざまな情報の俯瞰を試みてきた「サイコムニュース」について，発行の経緯と目的や，時代背景，概要，および今後の課題・展望について概観する．

2007年1月30日受付　2007年2月18日受理
NPOサイエンス・コミュニケーション 会員　CoSTEP2006年度受講生
連絡先：東京都品川区東品川2-2-24　天王洲セントラルタワー 4F　シグマアルドリッチジャパン株式会社　新事業開発部

3. 発行の経緯と目的

「サイコムニュース」発行の経緯は，発行母体であるサイコムジャパン設立の経緯と置き換えてもよい．サイコムジャパンの前身は，1998年にスタートした「研究問題メーリングリスト」[3)]である．

「研究問題メーリングリスト」では，もっぱら研究者側の視点から，研究者の職場環境や科学技術行政に関する議論が行われていた．この中で大きく取り上げられてきた話題は，研究者相互間のコミュニケーションが適切に行われていないために，当事者不在の研究システム改革が行われようとしている，ということであった．しかも，それぞれの研究者の主張は，科学技術全体がブラックボックス化し，社会と研究者との距離が大きくなる中においては，タックスペイヤーである市民からの支持が得られないという状況にあった．この現状を打破するため，「研究問題メーリングリスト」参加有志の手によって，サイコムジャパンは設立された．

サイコムジャパンでは，「研究問題メーリングリスト」をさらに発展させ，研究者相互間，さらに市民と研究者との双方向コミュニケーションを促進することによって，大学や研究機関と社会の距離を近づけ，科学・技術に関する諸問題を市民と研究者がともに解決することを目指している．さらにそのことによって，科学研究の知が社会に生かされる「知を駆動力とした社会」の構築を目指している．

「サイコムニュース」は，こうしたサイコムジャパンのミッションを達成するための，科学コミュニケーション促進を目的とする「ポータル情報ツール」として誕生した．サイコム会員であるかどうかに関わらず，だれでも購読できるようにしているのはそのためである．

編集作業は，創刊以来，一貫してサイコム会員有志によるボランティアで行っている．現在は，ウェブを使い，筆者を含めて実質2名ですべての編集作業を行っている．

4. 創刊当初の時代背景

「サイコムニュース」についてよりよく知るために，創刊時の2003年とはどのような年であったのか，概観しておく必要があるだろう．2003年は，ちょうど第2期科学技術基本計画（2001年度から2005年度まで）の実施期間に含まれる．

第2期科学技術基本計画では，本文冒頭部分にあたる「基本理念」の中で，「社会が科学技術をどのように捉え，判断し，受容していくかが重要な鍵となる」と指摘している．そのうえで，「「社会のための，社会の中の科学技術」という観点の下，科学技術と社会との間の双方向のコミュニケーションのための条件を整えることが不可欠である」と明記している．言い換えれば，2003年当時は，いかに科学技術が社会に受け入れられるかということが，科学技術の発展にとって重要であるとされていたのだ．ここで取り上げられた「双方向のコミュニケーション」というのももっぱら，トップダウンで下りてくる科学技術が，社会（もしくは市民）に受け入れられるための手段のひとつであるととらえられていた．

それに対し「サイコムニュース」は，発行当初から「科学コミュニケーション」を広く解釈し，一貫して編集方針に反映させてきた．その理由は，ステレオタイプの「科学技術の社会的受容」を目的とした双方向コミュニケーションにとどまる限り，必ずしも市民と研究者・科学者との間に生じる，錯綜した利益相反を解決する糸口を見出すことができないと考えてきたことによる．

5.　これまでの内容

上記の編集方針に基づき，国内外の研究ニュースをマクロからミクロの話題まで，幅広くクリッピングしている．さらに，記事クリッピングを通じて感じたことなどを，Editorialの形で記述している．編集クリッピングによって得られた情報で「サイコムニュース」に収載しきれない情報については，

サイエンスカフェポータル[4)], 科学イベントポータル[5)]などにアーカイブしている．ニュースソース自体も，可能な限りアンテナを広げる努力を重ねている．ぜひ実際の「サイコムニュース」を読んで，内容をご確認いただきたい．

6. 今後の課題

他に類を見ない，科学技術および科学技術コミュニケーションに関する総合的なメールマガジンだけに支持してくださる方が増え，購読者数は一貫して伸び続けている．いっぽう，今後に向けての課題も残されている．以下に私見を述べる．

6.1 分量が多すぎて読みづらい

いろいろな記事が幅広い情報ソースからリンクされていて，有用と感じる読者がいる反面，長すぎて読む気がしない，という不満の声も少なからず受けている．抜本的改善が必要な時期に来ていると感じているが，既に多くの読者が定着しており，個人の一存で簡単に変更することができなくなっている．

この問題を緩やかに改善させるために，たとえば東北大学・坪野吉孝教授の "Tsubono Report" [6)] のように，時期を決めてメールマガジンからコンテンツすべてをウェブに移行させるか，代表的な記事と紹介文だけをメールマガジンで配信して，残りはウェブに誘導するという決断を，どこかですべきなのであろう．

6.2 単なるリンク記事の羅列に終わっている

これも克服すべき課題のまま，保留になっている懸案事項のひとつである．記事の羅列だけなら編集後記しか読まない，という読者の方からの意見も拝聴している．記事のクリッピング作業の締め切りを早めに設定し，記事のまとめや意見，要約を随所に織り交ぜることによって，書き手の意見を読みたいという読者のニーズに沿うようにしていくのがよいと思われる．

6.3 Web2.0時代のメディアへの対応

メールマガジンは旧来型の情報伝達メディアであり，双方向性コミュニケーションを目指す科学技術コミュニケーションのツールとして，Web2.0に対応した媒体への移行を検討すべき時にきていると考えられる．仕事量と人的資源の関係を考えたうえで，最適なコミュニケーションツールを志向したい．

6.4 情報面での偏り

サイコムジャパンは，基本的なスタンスとして「サイコムニュース」の想定読者を，科学者・研究者，政策決定者，科学コミュニケーター，科学ジャーナリスト，市民など，科学的な関わりを持っている人々すべてにおいている．関心の程度の差こそあれ，現代社会において科学コミュニケーションをまったく必要としない人々はいない，と言い換えることもできるだろう．

そのため，幅広く科学コミュニケーションのポータルとしての役割を果たし，社会に影響を与えていくためには，アカデミックの分野にとどまらず，企業や市民社会などにおける科学コミュニケーションについてももっと積極的に取り上げる編集努力が必要であろう．

6.5 海外の情報が弱い

海外情報の日本語の要約や，分析などにも注力したい．

7. ま と め

編集に関わる人的資源が乏しいのは永遠の課題である．これまでは「サイコムニュース」発行の経緯や目的をわかりやすく伝え，仲間をふやす努力が不足していたのではと感じる．今後，科学コミュニケーター人口が増え，科学コミュニティのポータル情報ツールとしての「サイコムニュース」のあり方を話し合う機会を増やしていけば，一緒に科学コミュニティの発展のための活動に参加しようという，志のある方々が自発的に出てきてくれるものと考えている．

注

1）http://www.scicom.jp/mailmag/index.html
2）http://scicom.jp/
3）http://scicom.jp/research/
4）http://cafesci-portal.seesaa.net/
5）http://sci-event.seesaa.net/
6）http://www.metamedica.com/

本稿の考察にあたっては，科学技術振興調整費 新興分野人材養成プログラム「科学技術コミュニケーター養成ユニット」で学んだことが活かされている．